

<学術的読み物>

小学校国語科読み物教材の思い出

—— 学習指導要領の改訂と時代背景を通して ——

大 石 緑

Midori OHISHI

東亜大学 人間科学部 心理臨床・子ども学科
green-stne@toua-u.ac.jp

《要 旨》

小学校時代に国語の教科書で出会った読み物は大人になっても懐かしく思い出す。筆者は小学校の教員となり、子ども時代とは違った視点から読み物教材に接することになる。

本稿は、学習指導要領の改訂とその時代背景を探りながら読み物教材が持つ魅力や指導について述べる。ただし、筆者が小学校教員時代（1975年～2012年）に取り組んだ指導が中心となる。資料が残っていないため筆者の体験を回顧しながら述べる。

キーワード：読み物教材，小学校，国語，学習指導要領，物語教材，児童文学

1. はじめに

本稿では、筆者の教員時代の国語科読み物教材の指導方法について、当時の学習指導要領の内容と時代背景を探りながら述べる。筆者は、小学校時代から物語を読むことが好きで特に国語の教科書に掲載されていた物語の思い出は強く心に残っている。そのため筆者が教員を志望する基になった小学校時代の読み物教材の授業についてもふれることにする。

2017年（平成29年）の改訂により、2020年度（令和2年）から小学校では新学習指導要領による授業が本格的にスタートした。

今回の改訂は8回目の改訂となるが、今も教科書に掲載され続けている読み物教材が求めている目標や魅力についても述べることにする。

2. 学習指導要領とは

学習指導要領とは、日本中どこでも同じ水準の教育が受けられるための教育課程編成の基準

である。各学校は、学習指導要領にもとづき創意工夫しながら教育課程を作成している。学習指導要領は、文部科学大臣が告示し法的拘束力を持っている。また、時代や子どもたちを取り巻く状況の変化、社会の要請によりほぼ10年毎に改訂されている（田村 2020）。

2.1 学習指導要領改訂の歴史

1947年（昭和22年）3月に学校教育法、同年5月に学校教育法施行規則が制定された。このとき、学校教育法第20条の規定に基づいて教育課程（当時は「教科課程」）の基準としての学習指導要領がはじめて試案の形で作成された。

特色としては従来の修身、日本歴史及び地理を廃止し、新たに「社会科」と、男女が一緒に学ぶ「家庭科」が新設された。また、1年間を35週として週当たりの授業時間数が示された（表1、文部科学省 2017）。

表1 1947年総時間数と週当たりの時間数

	総時間数	週時間数
小1	770	22
小2	840	24
小3	879	25～26
小4	980～1050	28～30
小5	1050～1190	30～34
小6	1050～1190	30～34

(文部科学省学習指導要領より筆者作成)

2.2 「教科課程」から「教育課程」へ

1951年(昭和26年)の1回目の改訂では「教科過程」から「教育課程」へ名称が変更され、初の全面改定が行われた。しかし、法的拘束力のない試案のままであった。

この時の改訂では、教科を学習の基礎となる教科(国語, 算数), 社会や自然についての問題解決を図る教科(社会, 理科), 主として創造的な表現活動を行う教科(音楽, 図画工作, 家庭), 健康の増進を図る教科(体育)の4つに分類された。これらの科目については総時間数が改定され、配当時間が定められた(表2)。

表2 1951年総時間数と週当たりの時間数

	総時間数	週時間数
小1	870	24～25
小2	870	24～25
小3	970	25～28
小4	970	27～28
小5	1050	30
小6	1050	30

(文部科学省学習指導要領より筆者作成)

国語科においては、読み書き能力に力を入れる基礎・基本の定着が図られた。また、毛筆習字は国語の一部として4年生から実施された(文部科学省2017)。

2.3 基礎学力の充実

1958年(昭和33年)の改訂は、基礎学力(国語, 算数, 理科)の充実に重点が置かれ、国語, 算数の授業時間を増やす施策が採られた(表3)。それは、前回の学習指導要領には、表

2が示すように配当時間の定め方に幅があり、地域差が生まれたからである。

表3 1958年総時間数と週当たりの時間数

	総時間数	週時間数
小1	816	24
小2	875	25
小3	945	27
小4	1015	29
小5	1085	31
小6	1085	31

(文部科学省学習指導要領より筆者作成)

注)小1は34週の時間数

1957年、ソビエト連邦が世界初の人工衛星「スプートニクス」の打ち上げに成功した。それを受け、日本では国際的な技術革新に負けない人材育成を求める声が高まった。基礎学力と科学技術教育に力を入れる、いわゆる詰め込み教育が始まったのである。

また、道徳が新設され、道徳教育を徹底して行なうことも求められた。

この改訂は法的拘束力を持つはじめての告示でもあった。これにより国は、教育課程の最低基準を示し義務教育の水準の維持を図った(田村2020)。

2.4 筆者の小学校時代

1964年(昭和39年)、小学校6年生であった筆者の心に残っている読み物は、小川未明の『野ばら』である。教員を志すきっかけとなった作品である。この作品は1959年から1991年まで、5年生や6年生の教科書に掲載されていた。国境を守る老人兵士と青年兵士の心の交流を描いた作品で、国境を守る二人の心の変化が野ばらの描写から読み取れた。

心に残っているのは「近くに野ばらが茂っていて、ミツバチたちの心地よい羽音がいつも響いていました。」(光村図書6年教科書)という二人が出会った時の情景描写だ。はっきりとした描写は覚えていなかったが、白い野ばらの花とミツバチは鮮烈に心に焼きついている。今でも実家の庭に咲く野ばらとミツバチを見るたびに、小学校6年生のころの担任やクラスメート

の顔が思い浮かぶ。

同時に木造校舎、板張りの教室の床や廊下も思い出す。現在はチャイムだが始業・終業の合図は、教頭先生が鐘を鳴らしていた。廊下は家から持ってきたぬか雑巾でピカピカに磨いていたことも懐かしい。筆者にとって「野ばら」の物語は、大人になっても様々なことを思い出させてくれる。

2.5 「詰め込み教育」へと

1968年（昭和43年）の改訂は、1964年の東京オリンピックや新幹線の開通等の高度経済成長を時代背景に実施された。この改訂により、1年から6年までの総授業時間数がそれまでで一番多い学習指導要領となった。

教育課程は国語、社会、算数、理科、音楽、図画工作、家庭、体育、道徳、特別活動に編成し直された。俗にいう、「詰め込み教育」の時代であり、「七五三」という言葉が生まれた。それは、学習を理解しているのは、小学校で7割、中学校で5割、高等学校で3割という意味である（田村 2020）。

筆者はこの時代に高校生であり、受験地獄の真ただ中にいた。0時間目があり放課後の個別指導も受けたが筆者は「七五三」の3割の中には入らない高校生であった。

3. 教員としてのスタート

筆者が大分県の教員採用試験を受けたのは、1974年（昭和49年）だった。その当時、合否判定はA・B・Cに区分されていた。A判定は4月採用、B判定は9月採用、C判定は不合格である。A判定をもらったものは10名くらいだったと記憶している。新採用教員の多くが僻地に配属されていた。

筆者はC判定であったため、1年間臨時教員として筆者の出身校である小学校に勤務することとなった。そこでは4年生の担任をした。

3.1 4年生の担任

4年生は「ギャングエイジ」^(注1)と呼ばれるだけあって自立心や仲間意識が強い元気いっば

いの学年だった。

子どもたちと対面した初日は緊張した。それは、筆者が小学校6年生だった時の担任の病休代替教員としての採用だったからである。病気で休んでいる担任の代わりに頑張らねばという気持ちが強くあったことを覚えている。

木造校舎は鉄筋校舎に変わっていたが、周りの景色は昔と同じだった。子どもたちは広く感じた運動場で休み時間のたびに子どもたちとドッジボールをしたり鬼ごっこをしたりした。校舎の前にある小山に登ったりして子どもたちとコミュニケーションをとった。のんびりした時間が流れていた。

クラス担任をしながら教員採用試験の勉強をした。夏休みの猛勉強で合格した。このころの夏休みは自宅研修と称して自宅で過ごすことができた時代であった。

3.2 「ごんぎつね」と「一つの花」

このとき、筆者がこれから何度となく子どもたちと学習することとなる「ごんぎつね」と「一つの花」の名作に出合った。この二つの「読み物教材」は今も光村図書をはじめ多くの教科書会社で掲載され続けている。

筆者自身が読むことが好きだったので、「どんな気持ちを込めて読んだらよいか。」という問いで授業を進めた。たとえば、「ごんぎつね」では、兵十の独り言や情景描写にごんや兵十の心情を重ねて音読させた。気持ちは、想像できても音声化することが難しかった。

「一つの花」は戦争に関する読み物教材である。作中で描写されている戦争中と戦後の二つの場面の違いを比較させ、家族愛と平和のありがたさに気付かせたかった。そのため、ノートのパージを戦中と戦後に二等分し、世の中の様子、登場人物、コスモスの花から違いを対比して書かせた。その結果、明らかな違いに気付いた子どもたちは、戦後の場面を明るく元気な声で読むようになった。

筆者の心の中で「一つの花」のコスモスの花は、命の尊さと平和の象徴となった。秋になり、満開のコスモス畑を見ているとゆみ子の「ひとつだけちょうだい。」の声が聞こえてくる

ような気がする。

3.3 新採用教員としてスタート

1976年（昭和51年）から新採用教員として由布院小学校に着任した。運がよかったのか悪かったのか自宅から通勤できる学校であった。

由布院小学校で最初に担任をしたのは2年生だった。当時は新任教員が一番受け持ちやすい学年だと言われていた。素直でかわいらしい子どもたちだった。

3.4 「スーホの白い馬」

国語の読み物教材では、1971年（昭和46年）から掲載されている「スーホの白い馬」が心に残っている。モンゴルの楽器「馬頭琴」が生まれる物語である。

この教材の学習目標は、「様子を思いうかべて」だった。筆者は、「様子を思いうかべながら音読ができる」を子どもたちの目標にした。

2年生の読み物としてはかなりの長編だったため、まず、話の内容を理解させるために舞台となるモンゴルの国の話をしてから読み聞かせをした。授業では、少年と殿様の白馬に対する気持ちの違いや、馬頭琴を弾く最後の場面のスーホの気持ちについて話し合った。

家庭学習で毎日「音読」を課し、親に「認め」をもらうようにした。読み終わるまでかなりの時間を要する子どももいたが、親たちもよく付き合ってくれたものだ感謝している。そのおかげもあり、子どもたちは、白馬を思う少年の気持ちや周りの様子を上手に音読できるようになった。今でも物語の世界に入り込んで自信たっぷりを読む子どもの顔が浮かんでくる。

4. 読み物教材の指導方法

教員となり国語研究会に所属し、指導方法について研究した。日本教職員組合が主催する「教育研究集会」で、他県の教員と物語教材の指導法について熱く語り合った。

教育研究会の報告書（日本教職員組合1979）では、文学作品の読み方指導について論議が行われたことが書かれている。以下は、「日本の

教育・国語編」から筆者の授業に影響を与えた文学作品の指導方法について述べる。

当時推奨されたのは、作品全体の描写された形象について一つ一つの単語を丁寧に扱いながら事実を読み取る一次読みの後、個人的なイメージから作品が表現しているものへと高め、主題を導き出す二次読みへと深化させる方法であった。子どもたちが一次読みで事実を読み取り、その後人物の気持ちを想像させたほうがより深化した読みになるという考えだ。

筆者は、音読練習によって作品の全体的なイメージをつかむ一次読みから、作品の主題に迫っていく二次読みの方法を実践した。読み取った文章を心情込め音読させることで、さらに深化した音読へと変わった。

また、児童言語研究会の「一読総合法」も実践した（森田他1998, p.77）。一人読みの段階で自分の考えや疑問に思うことを書き込んでいくという方法だった。この方法は読みの姿勢を能動的にする上で有効であった。筆者は、4年生の「ごんぎつね」で実践した。情景描写とごんと兵十の独り言に着目させ、考えや疑問に思うことを書かせた。

しかし、書き込みの仕方の理解について個人差があったため、それを埋めるための話し合い活動に時間をかける必要が生まれた。標準授業時間数の2倍くらいの時間を要したが、家庭学習で書きこみをしてきた子どもたちの疑問を解決する授業は活発なものとなった。この「一読総合法」は、一人読みの段階で個人差等が生まれ時間がかかるので一度の挑戦で終わったが、子どもも教師も勉強になった実践だった。

主題に迫るための発問についても研究した。主題とは作者の意図を問題にするのではなく、作品そのものが訴えかけているものであるということもわかっているが、作者の意図については教える側の教師が持つておくものであって、子どもたちに押し付けるべきではないという結論に至った。この議論は、教師の作品理解に大いに役立った。

5. ゆとり教育

1977年（昭和52年）の学習指導要領の改訂で、増え続けていた授業時間が削減された。1968年の改訂では総授業時数が5,821時間であったが、36時間削減され5,785時間となった（表4）。その背景としては、知識つめこみ教育へ偏りすぎた結果、受験戦争、おちこぼれ、校内暴力、いじめ、自殺等の社会問題が起きたことが指摘できる。

表4 1977年総時間数と週当たりの時間数

	総時間数	週時間数
小1	850	25
小2	910	26
小3	980	28
小4	1015	29
小5	1015	29
小6	1015	29

（文部科学省学習指導要領より筆者作成）

改訂された学習指導要領では、「知・徳・体」の調和のとれた人間性豊かな児童生徒の育成に重点が置かれた。地域や学校の実態に即した授業時間数の運用や教師の自発的な創意工夫で授業をすることができるようになり、いわゆる「ゆとり教育」へと変わっていくのである（田村2020）。

5.1 高学年の担任になって

新卒2年目で5年生を担当し、6年生まで持ち上がった。クラスでは勉強のできる子ができない子を、強い子がおとなしい子をいじめる、あるいはからかうということが起きた。また、このころすでに中学受験をする子どももいた。このような知識偏重主義に偏った教育の中で人間性豊かな子どもを育てるにはどうしたらよいか頭を悩ませた。

道徳教育では、相手の立場に立って考える内容の長編の物語を読ませた。国語で培った読解力で、登場人物の思いを語ることで子どもの心情の変化を期待する授業をした。現在の道徳教

育が求めている「考え・議論する道徳」をすでに実践していた。

国語では、5年生の授業で「大造じいさんとガン」を、6年生の授業では持ち込み教材として「ペロ出しチョンマ」^(注2)を用いて思いやりの心を育てた。

5.2 「大造じいさんとガン」

5年生の教材である「大造じいさんとガン」は、大造じいさんとガンの頭領「残雪」との戦いの物語である。残雪との戦いに対する大造じいさんの心の変化を場面ごとに読み取らせた。手掛かりにしたのは、大造じいさんの発する言葉や情景描写だ。

最初は残雪を敵視していた大造じいさんが最後には残雪を尊敬するようになる。この教材を通して、クラスの子どもたちがお互いの良いところを認め合い尊敬できる関係になってくれたらよいという願いを込めた。

この授業から47年経った今、もうすぐ還暦を迎える子どもたちと会うことがある。授業の話や怒られたこと等の話に花が咲く。当時のいじめっ子やいじめられっ子が集まる。教育の成果はすぐには表れないものであるが、お互い尊敬できる間柄になっていることを嬉しく思う。

5.3 「ペロ出しチョンマ」

当時の学習指導要領では、学校の実態に即し教師の自発的な創意工夫で授業をすることができたため、教科書にはなかったが、この作品を持ち込み教材として授業をした。

江戸時代、父親の直訴が原因で家族全員が貼り付けの刑にされた話である。眉を八の字に下げてペロっとペロを出し、怖がる妹のウメを笑わせようとした長松は、ペロを出したまま槍で突かれて死んでしまった。

社会で歴史の勉強をしていたので江戸時代の身分制度と絡めて差別について考えさせた。残酷な場面があり、怖くて悲しい刺激的な内容であったが、活発に意見が出た授業だった。

この物語の作者は斎藤隆介で、ほかに「モチモチの木」や「花さき山」などの作品がある。この2作品は教科書に掲載されていた。語り表

現で書かれた文章と、切り絵作家の滝平二郎の幻想的な絵が心に残っている。豆太の勇気をたたえるように美しく灯がともったモチモチの木と、「花さき山」の真っ赤なヒガンバナは今でも鮮やかに思い出す。

6. ゆとり教育中期

1989年（平成元年）の改訂からは、低学年の「社会科」「理科」を廃止して「生活科」が導入された。それに伴い、低学年の国語の力の充実を図るため、1年生では34単位時間、2年生では35単位時間が増やされた。このとき、学校週6日制から隔週週5日制となった（表5）。

表5 1989年総時間数と週当たりの時間数

	総時間数	週時間数
小1	850	25
小2	910	24
小3	980	26
小4	1015	29
小5	1015	29
小6	1015	29

（文部科学省学習指導要領より筆者作成）

日本社会では1991年にバブルが崩壊し、株価と地価の大暴落が起き銀行や企業の倒産があいついだ時代であった（田村 2020）。

6.1 湾岸戦争

世界に目をやると、1991年1月17日「湾岸戦争」が始まった。アメリカが率いる多国籍軍がイラクを攻撃したのである。

その年、筆者は6年生を担当していた。近くのテレビ局がクラスに取材に来た。子どもたちはこの戦争をどう見ているのかという質問だった。それは、毎日のようにテレビニュースで、ミサイル攻撃の閃光が夜空に飛び交っている映像が流されていたからだ。子どもたちには、まるでゲームをしているかのように見えたと言う。兵器は、確かパトリオットミサイルと聞いていた。

子どもたちは、この戦争の映像を面白がって見てはいなかった。「戦争はよくない。」「弱いものが苦しめられるから、早くやめるべきだ。」等の意見を言った。子どもたちは遠い国の出来事ととらえていなかったことは嬉しかった。しっかりと自分の考えを述べる事ができたテレビ局の取材は、戦争について深く考えるきっかけを与えてくれた。

6年生の子どもたちは、この時すでに戦争に関する読み物教材、坪井栄の「石うすの歌」を学習していた。この話は、広島から疎開してくる従妹の瑞枝を迎えるためにおばあさんと千枝子が石臼で粉を引く場面から始まる。瑞枝はお母さんと二人で田舎に疎開して来るが、お母さんは広島に戻る。瑞枝のお母さんが広島に戻った日の朝、原子爆弾が落とされ瑞枝のお父さんとお母さんは亡くなってしまう。

この授業では、読み取った人物の気持ちや心を打つ文章を音声化し朗読会をすることを最終目標とした。読み取りの段階では、自分の生活と比べて感想文を書かせた。そこから問題を見つけ読みを深め、主題に迫っていった。この時の子どもたちの心には、平和を願う心が強くきざまれた。それは、心を打つ好きな場面を朗読する子どもたちの声に表れていた。感動的な朗読会になったことを覚えている。この授業は、テレビ局取材での子どもたちの発言につながった。

この学年で思い出すのは、朗読が上手だった「ともくん」という男子だ。恥ずかしがることなく堂々と気持ちを込めて朗読した。

6.2 初めての1年生担任

高学年の担任が多かったが、教員になって13年目に初めて1年生の担任となった。1学年が5クラスある学年だったので、1年担任がベテランの先生に指導を受けながら頑張った。そこで、「大きなかぶ」の教材と出会った。

6.3 「大きなかぶ」

この物語は、おじいさんが植えたかぶが引張っても抜けなくなるほどぐんぐん大きくなり、だんだんと引張る人が増えていきとうと

うかぶはぬけました、という話だ^(注3)。

この話の面白いところは、登場人物がどんどん増えていくところや「うんとこしょ、どっこいしょ」という掛け声がリズムカルなところだ。繰り返しのリズムを声の大きさ、速さや抑揚をつけて音読させた。また、劇化させ楽しく授業に取り組んだ。

おじいさん、おばあさん、孫、犬、猫、ねずみと加わっていき、一番小さなネズミが加わったことによってかぶが抜けた場面は主題に迫る場面ととらえた。みんなと力を合わせるこのすばらしさ、小さな力でも成功につながるということに子どもたちは気付いた。

この「大きなかぶ」は、1977年（昭和52年）から現在まで教科書に掲載され続けている名作だ。

7. ゆとり教育後期

1998年（平成10年）の改訂は「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくむ観点から、完全週5日制が導入された。そのことにより、各学年とも年間70単位時間（第1学年は68単位時間）の削減となった（表6）。

表6 1998年総時間数と週当たりの時間数

	総時間数	週時間数
小1	782	23
小2	840	24
小3	910	26
小4	945	27
小5	945	27
小6	945	27

（文部科学省学習指導要領より筆者作成）

目玉として、第3学年以上に「総合的な学習の時間」が新設された。各学校が地域や学校、児童の実態等に応じて横断的・総合的な児童の興味関心に基づく学習を組み立て、創意工夫を生かした教育活動に取り組んだ（田村2020）。

7.1 「総合的な学習の時間」

教師が一番大変だったのが、「総合的な学習

の時間」をどのように教育課程に組み込んでいくかということであった。各学校が地域の特色を出した合科的な教育課程の作成に取り組んだ。

「総合的な学習の時間」のテーマは、学校全体で統一したものや、学年ごとのテーマなど様々であった。地域との連携を図る活動をする場合は、地域に出向き協力をお願いをした。

畑を借りて野菜作りをしたり田植えをしたりもした。畑には食べられるものがあるということでピーナツを植えたことがある。筆者は子どもとともに、畑で草取りをしたり肥料を与えたりして収穫を楽しみにした。ピーナツは土の中にできるということ子どもと一緒に学ぶことができた。「落花生」という別名はそのことを意味していることも知った。教師も発見の多い授業だった。

町の中の学校では、バケツで稲を育てたことがあった。夏休みの間も水やりを欠かさなかった。収穫量は少なかったが、もみを一升瓶に入れてもみ殻をはがすという戦時中の脱穀体験をした。なかなか脱穀できず、最後は教師が精米機で精米したということもあった。できた米を炊いておにぎりを作る予定だったので米を買った。成功例ではなくこんな失敗もあった。

これは国語、社会、理科との合科授業だった。この体験は、国語の作文力向上につながった。苦労した体験が、豊かな文章表現を生み出し平和のありがたさをしみじみと感ずることができた取り組みだった。

7.2 「ゆとり教育」批判

2003年に行われたPISA^(注4)の調査で、日本の学力や学習意欲が他国に比べて低水準であることが判明した。学校外での学習時間が少ないことや学力格差などの課題が明らかになった。俗にいう「PISAショック」である（田村2020）。

日本の社会では、授業時数の縮減や教育内容の厳選によって学力低下へとつながったのではないかという「ゆとり教育」についての批判が噴出した（合田2021, p.12）。国語では、読解力が平均並みであるなどの課題が明らかになっ

た。

この世代は、後々まで「ゆとり世代」と呼ばれるようになった。

8. 「確かな学力」の確立

2008年（平成20年）の改訂は、「生きる力」の理念を継承し、生きる力を支える確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視した内容だった。

確かな学力の育成に向けて基礎的・基本的知識・技能を習得させ、課題解決に必要な思考力、判断力、表現力等を育成するため国語、社会、算数、理科の授業時数が増加した。これは、「ゆとり教育」を批判する社会の要請があったからだ（合田 2021, p.12）。

特に国語科では「書くことに関する指導」の配当時間が決められ、（低学年は100単位時間程度・中学年は85単位時間程度・高学年は55単位時間程度）文章を書く活動に力を入れた。また、5、6年生の高学年に「外国語活動」が新設された^(注5)。

8.1 全国学力・学習状況調査

2007年4月から文部科学省は全国の6年生と中学校3年生を対象に「全国学力・学習状況調査」^(注6)を行った。この結果は情報公開されたことにより、当時結果の良かった秋田県の教育を参考にするという現象が全国的に起こった。

学校間の格差も顕著に表れた。筆者の勤務する小学校は大分市の中心部にあり、商店街、歓楽街があり外国人の子どもが多く学んでいた学校だった。子どもたちの学力差が大きく、学習状況はよくなかった。それでも学校はホームページで情報公開をした。

筆者の勤務校では、学力を上げるために算数の「能力別クラス」を作り低学力の子どもの底上げを行った。国語は、言語事項に力を入れ、主題を読み取るコツなども子どもに教えた。教師も子どももテストの点数を上げるために必死であった。そのため、塾通いをする子どもが多くなった。筆者は校長室で低学力の子ども

の指導にあたった。

8.2 外国語活動

筆者が校長として勤務していた大分市立荷揚町小学校は文部科学省から「外国語活動研究開発学校」の指定を受け、2010年（平成22年）まで3年間、主として英語を用いた教育活動「ことばコミュニケーション科」（外国語活動）の研究開発に取り組んだ。決められた時間数の中で、1年生から6年生まで各教科や「総合的な学習の時間」等と合科的なカリキュラムを組んで実践した。

国語科の「聞くこと・話すこと」の領域で、声の大きさ、速さ、間の取り方を考え、相手を意識し、相手に伝わるように話す活動に取り組んだ。

荷揚町小学校が最初に研究開発学校の指定を受けたのは、1996年（平成8年）である。「総合的な学習の時間」の「国際理解教育」としてカリキュラムを作成した。

2回の「研究開発学校」としての研究は、現在の3・4年生の「外国語活動」、5・6年生の「外国語科」の基を築いた。

8.3 道徳の「特別教科」化

2015年（平成27年）、道徳を「特別教科」とすることが告知された。

「特別教科」になったのは、数値評価がなじまない、学級担任が授業を行うことが望ましいという点からである。答えが一つではない課題に子どもたちが道徳的に向き合い、考え、議論する道徳教育への転換を図ることが求められた。その背景にはいじめの増加、子どもを取り巻く情報通信問題等社会状況の変化があった（田村 2020）。

また、2011年の東日本大震災も子どもの心に大きく影響を与えた。筆者の勤務校では、特別活動や学校行事の授業と関連させ励ましの言葉を書いたこいのぼりを作って被災地の小学校へ送った。これは、「ボランティア活動」の指導が子どもたちの心を動かした例だ。この時、筆者は校長としてこの取り組みに参加した。子どもたちや教師の取り組みに拍手を送り、感謝

の気持ちを述べた。

また、検定教科書や副読本が導入され道徳教育に取り組みやすくなった。教科書には、「泣いた赤おに」や「花さき山」等、国語の教科書に掲載されている教材も多い。

筆者は2012年（平成24年）に教諭として3年間、教頭として3年間、校長として3年間勤務した荷揚町小学校で定年退職した。

9. 心に残っている物語

大人になって心に残っている物語は、国語の教科書に掲載されていたものが多い。内容ははっきり覚えていないが、心に残るフレーズや挿絵を覚えていたりするものである。

9.1 読み物ランキング

2021年9月10日から9月17日まで、「ねとらぼ調査隊」が「小学校の国語の教科書で一番好きだったお話は？」というアンケートを大人対象に実施した。4,327票の投票結果から「読み物ランキング」の結果が報告されている（ねとらぼ調査隊 2021）。

- ① スイミー（2年生）
- ② ごんぎつね（4年生）
- ③ スーホの白い馬（2年生）
- ④ くじらぐも（1年生）
- ⑤ モチモチの木（3年生）
- ⑥ ちいちゃんのかげおくり（3年生）
- ⑦ 白いぼうし（4年生）
- ⑧ お手紙（2年生）
- ⑨ 大造じいさんとガン（5年生）
- ⑩ チックとタック（1年生）

9.2 一番好きな話

また、2023年5月13日に全世代の男女10,696人を対象にした「国語の教科書で一番好きな話」というアンケートの結果は、以下の通りである（ランキング！ 2023）。

- ① 走れメロス
- ② ごんぎつね

- ③ かさこじぞう
- ④ 注文の多い料理店
- ⑤ 手ぶくろを買いに
- ⑥ 大きなかぶ
- ⑦ スイミー
- ⑧ スーホの白い馬
- ⑨ モチモチの木
- ⑩ ちいちゃんのかげおくり

9.3 今も教科書に掲載されている物語

以下は、奈良県立図書館情報「教科書に載っている本」より光村図書に掲載されているものを筆者が抜粋したものである。

- ・ 1年生：「大きなかぶ」「くじらぐも」「はなのみち」「たぬきの糸車」
- ・ 2年生：「スイミー」「お手紙」
- ・ 3年生：「ちいちゃんのかげおくり」「手ぶくろを買いに」「モチモチの木」
- ・ 4年生：「一つの花」「ごんぎつね」「白いぼうし」
- ・ 5年生：「大造じいさんとガン」「わらぐつの中の神様」
- ・ 6年生：「やまなし」「ヒロシマの歌」

10. おわりに

筆者が小学校時代に出合い心に残っている読み物教材や、教員になってから子どもたちと学んだ読み物教材に共通することがある。それは、1) 情景描写が美しい、2) リズミカルである、3) 心を揺さぶる内容である、4) 物語の主題が明確である、などである。

これらの物語は社会状況や学習指導要領が変わっても親子3代4代と読み継がれていくであろう名作である。

〔注〕

- (1) 自立心や仲間意識が強まり集団で行動することが増える。小学校3年生から4・5年生くらいの時期の子どもを指す教育用語（文部科学省 2009）。
- (2) この話は当時、光村図書の教科書には掲載されていなかったが、大分県が夏休みの課題としていた6年生の「夏の友」に人権読み物として掲載されていた。
- (3) 「大きなかぶ」は、1977年から長年、多くの教科書に掲載され続けてきた。ロシアの民話が元になった物語である。
- (4) 国際機関である OECD（経済協力開発機構）が行う世界的な学力調査である。2000年から3年ごとに行われ、2022年の最新の調査は8回目となる。日本の教育カリキュラムの基準となる学習指導要領などにも PISA の結果から得られた知見が反映されている（ベネッセ教育情報 2024）。
- (5) 2011年度より、主に5、6年生を対象に週1回の外国語活動が必修化された。2020年度からは、小学校3、4年生では「外国語活動」、5、6年生では「外国語科」となり、後者では数値で評価を示すことになった。
- (6) 文部科学省が日本全国の小学6年生と中学3年生を対象に、2007年から毎年1回学力検査と学習及び生活環境のアンケート調査を実施している。
- (7) 日本教職員組合（1979）『日本の教育・国語編教育研究全国集会報告 第6集～第24集』秀研社
- (8) 藤田信義・山元隆春・山元悦子・千々岩弘一（1998）『国語科教育学の基礎』溪水社
- (9) ベネッセ教育情報（2024）「教育用語解説 PISA」https://benesse.jp/educational_terms/30.html（参照 2024年7月2日）
- (10) 文部科学省（2009）「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/1284369.htm（参照 2024年7月9日）
- (11) 文部科学省（2017）「学習指導要領等の改訂の経過」<http://www.mext.go.jp/a-menu/stotou/new-cs/idea/-ics>（参照 2024年7月9日）

<参考文献>

- 1) 合田哲（2021）「学習指導要領・教育改革の歴史と今」『教職課程』5月号：12-13
- 2) 田村学（2020）「5分で分かる小学校学習指導要領改訂のポイント」<https://teachforjapan.org/journal/9124/>（参照 2024年7月9日）

<参考資料>

- ・奈良県立図書館「教科書に載っている本～小学校の国語の教科書～」図書リスト https://www.library.pref.nara.jp/reference/honbako/textbook_elementary.html（参照 2024年6月20日）
- ・ねとらぼ調査隊（2021）「【小学校の国語の教科書】好きだったお話ランキング TOP17！1位は『スイミー』に決定！【2021年最新投票結果】」<https://nlab.itmedia.co.jp/research/articles/388060/>（参照 2024年6月20日）
- ・ランキングー！（2023）「10,696人が選ぶ！国語の教科書で『一番好きな話』ランキング」<https://rankingoo.net/articles/life/02261a>（参照 2024年8月25日）

Memory of reading materials for elementary school pupils in Japanese Language Textbooks

— Through revision and the historical background of the Curriculum Guideline —

Midori OHISHI

Department of Psychology and Child Education
Faculty of Human Sciences
University of East Asia
green-stne@toua-u.ac.jp

Abstract

The reading materials which I came across on the Japanese language textbooks in elementary school days remain next my heart. After working as an elementary school teacher, I had long read them from a different viewpoint from done in my childhood.

In this report, I show its appeal and ways of instruction for Children's literature in elementary school while considering the historical background and revising a process change for Curriculum Guideline. In this retrospect however, my teaching experience for the elementary school teacher era (1975-2021) plays a key role. In addition, I advance it based on my memory, because I do not have any written source at hand.

Key Word : reading materials, elementary school ,Japanese language, Curriculum Guideline, The story teaching materials, children's literature.